

## 巻頭エッセイ

### さて Lima (リマ) を探しにいこう

大下英治

りんかい日産建設株式会社  
執行役員(土木営業担当)



1 (tasi)、2 (lua)、3 (tolu)、4 (fa)、5 (lima)  
サモア語での数字の数え方。

サモア赴任を遡ること5年前の1988年、土木屋として第一歩を踏み出す。沖縄は那覇。防波堤・岸壁の築造、ケーソン製作。朝事務所を出れば夕方帰るまでは海の上。そんな訳で、日々作業船で仕事することとなる。ガット船、潜水土船、起重機船、クレーン付台船、コンクリートミキサー船。当時は船員さんと昼食を一緒にすることも多く、食器洗いは進んでやった。きれいな海を守ることを学んだ。

1993年、沖縄生活に順応したからということではないだろうが、赤道またいで南洋へ。西サモア国はアピア。100年ぶりの2つの大型サイクロン「オフア」と「バル」はアピアの町に大きな被害を与えた。ミッションは護岸をつくり防護水準を高めること。100年に1度のサイクロンに対して町を被害から守るのだ。ところが、海に面したホテルのオーナー「100年に1度のためだけに、99年と364日海が見られないのであれば護岸はいらない。」いったい何を護っていくべきか。南十字星の下で考えた。日本からクレーンを積んだ台船は途中シンガポールに立ち寄りサモアまではるばるやってきた。クレーンを降ろす港は無く近くの砂浜に乗り上げ降ろした。道中電線を上にあげながらクレーンを港まで運んだ。

2001年、財団法人への出向。東京は隼町。南十字星の下で考えた「何を護っていくべきか」北斗七星の下で得た答えは、「命を守ること」津波ハザードマップマニュアルを作成し全国で説明した。「津波でんでんこ」親子でもバラバラに逃げて「命を守る」北半球と南半球、2つの地点で学んだこと。

2004年12月、南半球インドネシアはアチェ。大きな津波が街を襲った。2005年ジャカルタの地に降り

立った。インドネシアはドマイ。ミッションは埠頭をつくることで貨物船の滞船を減少させ経済を活性化させること。「港づくりは街づくり」アジアの中心で、経済の潮流に巻き込まれる。人々の移動はバイクから自動車へ。ワルン(屋台)からレストランへ。旅館からホテルへ。400mの新しい栈橋。上下水道と小型発電所の建設。「開港祭り」では栈橋に人があふれかえった。ドラグサクシオン浚渫船は24時間稼動15,000m<sup>3</sup>/日(6,000m<sup>3</sup>×2.5航海)で60万m<sup>3</sup>の埋立はあっという間に進んでいく。中国国籍のクラブ浚渫船、使う言語はなんと漢字。浚渫、断面、床掘、彼らが使う漢字とは異なっているが、意思疎通には充分である。どのみち英語は通じない。表意文字と表音文字、2つの文化を学んだこと。

2011年、北半球東日本大震災。「津波でんでんこ」みんな無事か。2012年、宮城は女川町。水中ソナーで波にさらわれた車を見つける。ケーソンがひっくり返っている。鋼の岸壁は「く」の字に屈曲し、エプロンは垂直沈下と水平移動をしている。九州から大型バックホウ浚渫船、東京から起重機船を回航。3年で港を復旧した。「瓦礫が上がった岸壁にサンマが上がった」初老の漁師が静かに語った。女川の夜に一尺玉の花火が大きな音で「ドーン」と上がった。保安距離をとるため打ち上げ場所は海の上。起重機船はガレキを積んで捨石積んで最後は花火を積んだ。「作業船は夢も積める」を学んだこと。

赴任するたび学びが増える。作業船と共に。

1 (satu)、2 (dua)、3 (tiga)、4 (empat)、5 (lima) インドネシア語での数字の数え方。

サモアとインドネシア。海を隔て9,000キロ。どちらも数字の5はなぜかlima。他にもあるのかな。

『さてlima(リマ)を探しにいこう。』